

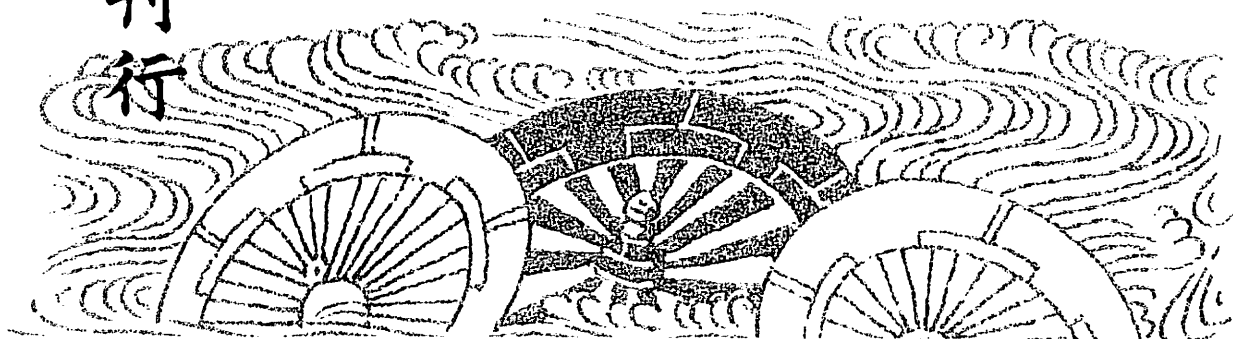
新日本古典文学大系
45

平家物語 下

梶原正昭
山下宏明
校注

岩波書店刊行

1993



「父で候し義重法師がおしへ候ひしは、敵にもおそはれよ、山越えの狩をもせよ、深山にまよひたらん時は、老馬に手綱をうちかけてさきに追ッたててゆけ。かならず道へ出づるぞ」とこそをしへ候しか。御曹司、「やさしうも申たる物かな。雪は野原をうづめども、老たる馬ぞ道は知るといふためしあり」とて、白茸毛なる老馬に、かぶみ鞍をき、しろぐつははげ、手綱むすんでうちかけ、さきに追ッたてて、いまだ知らぬ深山へこそ入り給へ。比はきさらぎはじめの事なれば、峰の雪むら消えて、花かと思ゆる所もあり。谷の鶯をとづれて、霞にまよふところもあり。のぼれば白雲皓々として聳へ、下れば青山巉々として岸たかし。松の雪だに消やらで、苔のほそ道かすかなり。嵐にたぐふおりくは、梅花とも又うたがはるれ。東西に鞭をあげ、駒をはやめてゆく程に、山路に日暮れぬれば、みなおりみて陣をとる。

武蔵房弁慶、老翁を一人具して参りたり。御曹司、「あれはなにものぞ」と問たまへば、「此山の獵師で候」と申す。さては案内は知ッたるらん。ありのまゝに申せ」とこそそのたまひけれ。「争か存知仕らで候べき」「これより平家の城郷一谷へ落さんと思ふはいかに」「ゆめく叶ひ候まじ。卅丈の谷、十五丈の岩さきなど申所は、人のかよふべき様候はず。まして御馬などは思

ひもより候はず。其うへ、城のうちに落しあなをも掘り、ひしをもうへて待まいらせ候らん」と申。「さてさ様の所は鹿はかよふか」「鹿はかよひ候。世間だにもあたゝかになり候へば、草のふかに臥さうどて、播磨の鹿は丹波へ越え、世間だにさむうなり候へば、雪のあさりにはまんとて、丹波の鹿は播磨の印南野へかよひ候」と申。御曹司、「さては馬場ごさんなれ。鹿のかよはふ所を、馬のかよはぬやうやある。やがてなんぢ案内者つかまつれ」とぞのたまひける。「此身はとし老てかなうまじひ」よしを申す。「汝が子はないか」。「候」とて、熊王と云童の生年十八歳になるをたてまつる。やがてもとどりとりあげ、父をば鷲尾庄司武久といふ間、これをば鷲尾の三郎義久と名のらせ、さきうちせさせて、案内者にこそ具せられけれ。平家追討の後、鎌倉殿になかたがうて、奥州で討たれ給ひし時、鷲尾三郎義久とて、一所で死にける兵物也。

一二之懸

六日の夜半ばかりまでは、熊谷・平山搦手にぞ候ける。熊谷二郎、子息の小

一底本「候へし」とあるのを改める。
二敵に襲われた場合にしても、遠く山を越えて狩をしている場合にしても。
三手綱を短く結び合せて、鞍の前にかけるさま。裝備した鞍置馬を放って歩ませる時のやり方。
四立派なことを言うもの。高い身分の人が、下位の者をほめる場合に多く用いる。相手の言葉に感心した思いを述べたもの。
五韓非子・說林篇に「管仲隰朋從於桓公而伐孤竹、春往冬反。迷惑失道。管仲曰、老馬之智可用也。乃放老馬而隨之。遂得道行」とあり、和漢朗詠集・將軍に、この故事を踏まえた羅虬の、「雪中放馬朝尋跡、雲外聞鶯夜射声」という詩が収められている。
六以前あったこと。前例。
七白い毛に黒や濃褐色のさし毛があるものを「茸毛」といい、その白毛がかつていっているもの。
八鞍の前後輪の山形の部分を金属で縁どりをしたもので、丸く光るようについた鉄製のくつわ。「はぐ」は、嘲ませること。
九峰に積もった雪がところどころまばらに消えて、遠目にはさながら花かと思まちはえるような所もある。
二白雲がかかった山が白々と光り輝いてそ

鷲尾、義経を案内 びえ立ち。「皓々」は、白く輝くさま。

三青葉の茂る山が陰しく輝いて断崖をなしている。「巉々」は、険しく聳え立つさま。
三松に積もった雪さえまだ消えず、苔におおわれた細い道がかすかに続いている。「み山」は松の雪だに消えなく都は野辺の若菜つみけり(古今集春上・読人しらす)。
四雪が強い風に吹かれて散る折は、梅の花ではないかと疑われるほどである。「花の香を風

七とても不可能でしょう。
八深き約九〇尺に及ぶ谷。一丈は約二尺。
九約四五尺の突き出た岩。
一〇竹や鉄の先端を菱の突のようにつけて突かせたもの。これを地面に植え並べて、敵の侵入を防ぐ障礙物とした。
二鹿は往來するか。「鹿は古くし」と読む。
三あたりが暖かになりさえずれば、「世間」は、感覚でとらえることができる外界一帯。あたり一面をいう。
三草の深く茂るところに臥せうとして。長音「う」を受け、「と」が濁音となる。
四雪が浅いところで餌をあさろうとして。「あさ」は、本来は川の浅いところ、浅瀬をいう。
五「はむ」は、口を動かして物を食うこと。
五現兵庫県加古郡から明石市にわたる地域。
六そうだとすると、馬場同然だ。「馬場」は、馬を調教するのに適した足場のよい場所。「ごさんなれ」は、「にこそあるなれ」の転。
七ほかならぬお前が案内をいたせ。「やがて」は、とりもなおさず、ほかならずの意。
八頭髪を頭の上で束ねて結い上げ、元服させること。三桓武平氏、貞衡の子孫とも、また丹波国多紀郡鷲尾の住人ともいうが未詳。
九馬に乗って軍団の先頭に立つこと。

熊谷父子・平山 三義経は、文治五年(一一六六)閏四月、藤原泰衡に攻められ衣川山の先陣争いの高館で自害した。

二郎をようで言ひけるは、「此手は、悪所を落さんずる時に、誰さきといふ事もあるまじ。いざうれ、これより土肥がうけ給ってむかふたる播磨路へむかうて一の谷のまッさきかけう」と言ひければ、小二郎、「しかるべう候。直家もかうこそ申たう候つれ。さらばやがてよさせ給へ」と申す。熊谷、「まことや、平山も此手にあるぞかし。うちごみのいくさこのまぬものなり。平山がやう見て参れ」とて、下人をつかはす。案のごとく、平山は熊谷よりさきに出て立って、「人をば知らず、季重におめてはひッとひきもひくまじひ物を」とひとり事をぞしめたりける。下人が馬をかうとて、「にッくい馬のながぐらみかな」とてうちければ、「かうなせそ、其馬のなごりもこよひばかりぞ」とてうッたちけり。下人はしりかへッて、急ぎ此よし告たりければ、「さればこそ」とて、やがてこれもうち出でけり。熊谷はかちのひたゝれに、あか皮おどしの鎧着て、くれなゐのほろをかけ、ごんだ栗毛といふ、聞ゆる名馬にぞ乗ッたりける。小二郎は、おもだかを一しほすッたる直垂に、ふしなは目の鎧着て西楼といふ白月毛なる馬に乗ッたりけり。旗さしは、きちんの直垂に、小桜を黄にかへいたる鎧着て、黄河原毛なる馬にぞ乗ッたりける。落さんずる谷をば弓手に見なし、馬手へあゆませゆく程に、としごろ人もかよはぬ田井の畑といふふ

る道をへて、一の谷の浪うちぎはへぞ出たりける。一谷ちかく塩屋といふ所に、いまだ夜ふかりければ、土肥二郎実平七千余騎でひかへたり。熊谷は浪うちぎはより夜にまぎれて、そこをつッとうちとをり、一谷の西の木戸口にぞをしよせたる。その時は、いまだ夜ふかりければ、敵の方にもしづまりかへッておともせず、御方一騎もつゝかず。熊谷二郎、子息の小二郎をようで言ひけるは、「我も」と先に心をつけたる人々はおほかるらん。心せばう直実ばかりとは思ふべからず。すでによせられたども、いまだ夜をあくるを相待て、此辺にもひかへたるらん。いざ名のらう」とどて、かいだてのきはにあゆませより、大音声をあげて、「武藏国住人、熊谷次郎直実、子息の小二郎直家、一谷先陣ぞや」とぞ名のッたる。平家の方には、「よし、をとなせそ。敵に馬の足をつからかさせよ。矢だねを射尽させよ」とて、あひしらふものもなかりけり。

さる程に、又うしろに武者こそ一騎つゞひたれ。「たそ」ととへば、「季重」とこたふ。「とふは、たそ」「直実ぞかし」「いかに熊谷殿はいつよりぞ」「直実は夜居より」とぞこたへける。「季重もやがてつゞひてよすべかりつるを、成田五郎にたばかられて、いままで遅くしたる也。成田が死なば一所で死なうどちぎるあひだ、さらばとてうちつれよするあひだ、いたう、平山殿、

一鶴越の悪所を駆け下りる時に、誰が先駆けといふこともなからう。全軍が一同となつて駆け下りるため、先陣の功名を立てることは不可能であるの意。二さあお前、「うれは、代名詞「おれ」の転。相手のものしつてよびかける言ひ方。おまえ、きさま。三上肥実平が命をうけて進撃している。四軍団の先頭になつて攻め入らう。先駆けをしよう。五そう申し上げたと思つていました。「かうは、前に述べられた直実の言葉をうけたもの。六そうだ。そうそう。ふと何かを思い出した時に発する語。七大勢が一同となつて敵中に討ち入つて戦ふこと。八騎打ちの対。ハ様子。ハこの季重に限つては、敵に対して一歩も後へは引かないぞ。「ひッとひき」のよみは止簡本による。二馬に飼葉を食わせながら。三長い時間をかけてゆつくりと草を食うさま。三そんな手荒なことはするな。「な、そ」は、「するな」という禁止の意をやさしく表す語。四その馬とも今夜かきりのお別れだぞ。五やはり思つたとおりの。予想したことが的中した時に発する語。六黒に近い濃紺の鎧直垂。七茜で赤く染めた革で織した鎧。百二十句本は黒糸織ノ鎧。七「母衣」と書く。矢が当たるを防ぐため背中に負う袋状の防具。布製で、竹を骨組みとして風を入れて丸くふくらませた。八盛衰記には、熊谷の下人の権太という舎人が、陸奥国一戸の牧で求め出したため、権太栗毛と名づけられたとする。また、上野国群馬郡の権田産の名馬とも。九沼や池に自生するオモダカの花の模様を薄く染めた布地の直垂。「しほは、染汁に二回も三回も漬けて濃く染め出すものに対し、一回染めにした薄い色合いのものをいう。「ッた

るは、刷つて模様をつけること。三白薄青紺の三色に染めた革を細く裁ち切つて細を並べたように波状に織した鎧。三盛衰記には、陸奥の三戸産の白色の名馬で、秘蔵のあまり飯屋の西に既をつくり、夜だけ引き出して愛したので、その白さを月に譬え、西の既を樓に見立てて、西樓と名づけたとある。三「月毛」は「鶴毛」で、鶴の羽の裏のように白色に薄く赤みを帯びたもの。その白味がかった毛並みの馬。三軍陣で大将の旗をもつ騎乗の従者。旗もち。二「きちん」は「麴麻（きん）」の略。麴（こ）に生じる淡い黄色のかびの色から、背みがかった黄色をいう。占くは刈安や紫草に灰を加えて染めたが、のちには縦糸に黄、横糸に青を用いて織りだした。その麴麻の布で仕立てた鎧直垂。三藍地に白く小さな桜の模様を染め抜いた革を、黄色に染め返したもので織した鎧。萌黄の地に緑の小桜の模様を帯び。二「河原毛」は、朽葉を帯びた白毛で、たてがみと尾が黒く、背に黒い筋があるもの。その黄味の濃い毛並みの馬。三これから駆け下りようとする谷を左の方角に見ながら。三現神戸市須磨区多井畑。三現神戸市垂水区塩屋。三「呼びて」の音便形。三先駆けの功名を立てようとする人たち。三あさはかに、先駆けをしようとしているのは、この直実だけだと思つてはならぬ。「心せばうは、思慮が浅く、狹量にの意。三「いまだは、後の「此辺」にもひかへたるらん」にかた。三船を並べて巨のようにしたもの。三相手になる者もなかった。三「宵」のつて字。底本「夜居」の右に「宵」と傍書。三藤原氏北家系、基忠の子孫助忠か。武藏国埼玉郡成田の住人。三遅れてしまつ

さきかけばやりなしたまひそ。先をかくるといふは、御方の勢をうしろにをいてかけたればこそ、高名・不覚も人に知らるれ。只一騎大勢の中かけ人ッて討たれたらんは、なんの詮かあらんずるぞ」とせいする間、げにもと思ひ、小坂のあるをさきにうちのぼせ、馬のかしらをくだりさまにひッ立てて、御方の勢をまつところに、成田もつとひて出できたり。うち並べていくさのやうをも言ひあはせんずるかと思ひたれば、さはなくて、季重をばすげなげにうち見て、やがてつとはせ抜いてとをるあいだ、あッぱれ、此ものはたばかつて、先かけうどしけるよと思ひ、五六段ばかりさきだたるを、あれが馬は我馬よりはよはげなる物をと目をかけ、もみもうで追ッついて、「まさなうも、季重ほどの物をばたばかりたまふものかな」と言ひかけ、うちすててよせつれば、はるかにさがりぬらん。よもうしろかけをも見たらじ」とぞ、言ひける。

熊谷・平山、かれこれ五騎でひかへたり。さる程にしのめやう／＼あけゆけば、熊谷は先に名のッたれども、平山が聞くに名のらんとや思ひけん、又かいだてのきはにあゆませより、大音をあげて、「以前に名のッつる武蔵国の住人、熊谷二郎直実、子息の小二郎直家、一の谷の先陣ぞや。われと思はん平家の侍共は、直実に落ちあへや、落ちあへ」とそのッしッたる。是を聞いて、

「いさや、夜もすがら名の熊谷おや子ひッさげてこん」とてすゝむ平家の侍たれ／＼ぞ。越中二郎兵衛盛嗣・上総五郎兵衛忠光・悲七兵衛景清・五藤内定経、これをはじめてむねとのつはもの廿余騎、木戸をひらいてかけ出でたり。こゝに平山、しげ目ゆひの直垂に、ひおどしの鎧着て、二ひきりやうのほろをかけ、目槽毛といふ、聞ゆる名馬にぞ乗ッたりける。旗さしは、黒かは威の鎧に、甲猪くびに着ないて、さび月毛なる馬にぞ乗ッたりける。「保元・平治兩度の合戦に、先かけたりし武蔵国住人、平山武者所季重」と名のッて、旗さしと二騎、馬のはなを並べておめいてかく。熊谷かくれば平山つゞき、平山かくれば熊谷つゞく。たがひにわれおとらじと人かへ／＼、もみにもうで、火出づる程ぞ攻めたりける。平家の侍ども、手いたうかけられて、かなはじとや思ひけん、城のうちへぎツとひき、敵をとさまにないてぞふせきける。熊谷は、馬のふと腹射させてはぬれば、足を越えており立ッたり。子息の小二郎直家も、生年十六歳」と名のッて、かいだてのきはに、馬の鼻をつかする程責寄てたゝかひけるが、弓手のかいなを射させて、馬よりとびおり、父とならんで立ッたりけり。「いかに小二郎、手負ふたか。」「さん候。」「常に鍛づきせよ、うらかゝすな。」「しころをかたぶけよ、うらかぶと射さすな」とぞをしへける。熊

たのだ。元約束したものだから。器「いたく音便形。ひどく、はなはだしく下の「さきかけばやりなしたまひそ」にかかる。

一先駆けをしようといふはやらせること。よみは正節本による。

二味方の軍勢を背後に置いて駆ければこそ、高名も不覚も人に知ってもらえるのだ。不覚は、思わぬ失策。

三何の甲斐があるか。「詮は、効果、張合い。馬の首を坂の下の方に向けるように手綱をさばいて馬を立てて。

四馬を並べて戦う手はずでも相談するのだからソッてなく一瞥しただけで。「すげなげ」は、無愛想なさま。

五一段は九尺約二七寸として、一五〇前後。ハ鞭打って馬を疾駆させ。

六見苦しくも、卑怯にも。

七「ずつと後方に遅れてしまっているだろう。二よもやわれわれの後姿すら見てはいまい。

三平山が聞いているところで、もう一度名乗ってやろうと思つたのであろう。熊谷・平山、三立ち向かつて勝負せよ。四大声でわめき立てた。

五平家の一門、盛後の子。

六藤原氏、伊勢武者忠清の第三子。伊勢に住み平家に家人として服属。景清は第四子。

七伝未詳。この名を欠く本がある。

八「日ゆひ」は、布地をつまんで糸で括って染め、糸目のところを白抜きにしたもので、いわゆる鹿の子絞りのこと。その「目」を多くし、白抜きの模様を一面に散らしたものをいう。

元輪の中に二本の横線を引いた模様のついた母衣。

二「槽毛」は、灰色に白のまじった毛並み。盛衰記には、武蔵国の姉崎立ちの名馬で、左の目に録突きがあったので、目槽毛と名づけられたとする。

三「鎧」で首筋をすっぽり覆うように冑を口深にかぶるさま。その状態が、首の短い猪の姿に似ているための称。

四三月毛に鉄さびのような赤褐色の毛がまじっているもの。

五保元平治の乱に、平山武者所が源義朝の配下の勇士として活躍したことが、保元物語、平治物語に見える。

六手きびしく攻め立てられて。

七敵を城砦のなかに入れず、その外側に置くようにして。

八「射られて」とあるべきところを、能動的にいったもの。受身を嫌う武士の心情から出た、軍記特有の表現。

九馬が跳びはねたので、片足を鞍越しにはずして地上におり立った。倒れる馬に足を敷き込まれないための、すばやい身のこなしである。

一〇「さ」に候の転。さようでございませう。

一一元鎧をゆすり上げて札と札との間にすき間が出来ないようにして、矢が突き立つことを防ぐさま。

一二冑のすき間から鎧の裏まで矢で射めかれるな。

一三「鎧」は、冑の鉢の左右と後に垂れて冑筋を覆う防具。顔面を射れないために頭を前方に深く下げ、その鎧が傾斜するようにすること。

一四冑の内側。顔面。

谷は、鎧に立ッたる矢どもかなぐりすて、城の内をにらまへ、大音声をあげて、「こぞの冬の比、鎌倉を出しより、命をば兵衛佐殿にたてまつり、かばねをば一谷でさらさんと思ひきッたる直実ぞや。室山・水島二ヶ度の合戦に高名したりと名のる越中次郎兵衛はないか、上総五郎兵衛・悪七兵衛はないか、能登殿はましまさぬか。高名も、敵によつてこそすれ、人ごとにあふては、えせまじものを。直実に落ちあへや、落ちあへ」との、しッたる。是を聞いて、越中次郎兵衛、このむ装束なれば、こむらごの直垂に、あかおどしの鎧着て、白茸毛なる馬に乗り、熊谷に目をかけてあゆませよる。熊谷おや子は、なかを割られじと立ち並んで、太刀をひたいにあて、うしろへひとひきもひかず、いよ／＼まへへぞすゝみける。越中次郎兵衛叶はじと思ひけん、とつてかへす。

熊谷これを見て、「いかに、あれは越中次郎兵衛とこそ見れ。敵にはどこをきらふぞ。直実にをし並べてくめや、くめ」と言ひけれども、「さもさうず」とてひっかへす。悪七兵衛是を見て、「きたない殿原のふるまひやうかな」とてすでにくまんとかけ出でけるを、鎧の袖をひかへて、「君の御人事、是にかぎるまじ。あるべうもなし」とせいせられて、くまざりけり。其後、熊谷は乗りがへに乗ッておめいてかく。平山も、熊谷おや子がたゝかふまぎれに、馬のい

きやすめて、是も又つゝいたり。平家のかたには、馬に乗ッたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さきをそろへて雨の降るやうに射けれども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず。「たゞをし並べてくめや、くめ」と下知しけれども、平家の馬は乗る事はしげく、かう事はまれなり。舟にはひさしう立てたり。よりきッたる様なりけり。熊谷・平山が馬はかいにかうたる大の馬どもなり。ひとあてあてば、みなけたをされぬべきあひだ、をし並べてくむ武者一騎もなかりけり。平山は、身にかへて思ひける旗さを射させて、かたきのなかへ割ッて入り、やがて其敵をとつてぞ出たりける。熊谷も分捕あまたしたりけり。熊谷さきによせたれど、木戸をひらかねばかけ入らず、平山後によせたれど、木戸をあけたればかけ入ぬ。さてこそ熊谷・平山が一二のかけをばあらそひけれ。

二度之懸

さるほどに、成田五郎も出きたり。土肥次郎まッさきかけ、其勢七千余騎、

一 現兵庫東御津町室津の丘陵。「水島」は現岡山県倉敷市玉島柏島。巻八「室山」「水島合戦」参照。

二 高名が立てられるのも対戦する敵次第で、誰彼かまわず戦つたからとて出来るものではないの意。功名を立てるには相手を選ぶことが大切だとして、勇士の名の高い自分と勝負せよと戦いを挑んだもの。

三 紺村濃。紺地のところどころを濃くむらに染めた鎧直垂。

四 父子二人の間を敵に押し隔てられまいと。

五 敵としてどこが不足か。

六 「さも候はず」の斬。相手の発言を受けて、それをやらず斬に打ち消す言ひ方。そんなことはありません。とんでもありません。

七 あなたの行動は見苦しいぞ。「殿原の「原」は、複数を表す接尾語。

八 いまにも組み打ちしよう。

九 御上君能登殿にとつての重大事は、この戦いには限るまい。

一〇 「あるべくもなし」の音便形。制止する場合に言う。もつてのほかに。

二馬が損傷した場合に乗り替えるように用意した予備の馬。

三大勢の味方の軍勢の中に、敵の直実らの姿がまぎれ込んで、矢を射当てることも出来ない。三 乗ることばかり多くて、食物を与えて飼うに太らせる機会が少なかった。

四 底本「より」の右に「彫」と傍書。これならば、彫刻したつくり物の馬のように身動きしないさま。また、「よる」を疲勞するの意にとれば、瘦せて衰弱した馬の意とも。「船ニタテ磯ニカケタル馬ナレバ、ヤセツカレテ、アテアテタレバタウレスベケレバ」(延慶本)。

五 一度体よりをくらわせれば、敵の馬は皆蹴倒されてしまふそうなきまなので。

六 わが身にかえてまでもと大事にしていた。

七 すぐさまその旗差を射た敵の首を取って出て来た。

八 そのために、後日、熊谷・平山の間で一番乗りかめくつて、言い争いが生じたのであった。「一二のかけ」は、先陣の一番二番を争うこと。